

人権なら

2023年12月1日

第156号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

ヒマラヤに挑んだ知的障害者

三宅町人権学習講座で映画上映とトーク

第5回三宅町地域人権学習講座が11月16日、交流まちづくりセンターMimimoであった=写真。



今年度最終回となる講座はドキュメンタリー映画「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」(写真)上映とトークがテーマ。講師は東大阪市にある社会福祉法人創思苑パンジーの林淑美・理事長、当事者の豊田瑛一さん、山田浩さん、支援者の山本俊作さん、福岡拳さんの5人と、映画監督の小川道幸さん。

映画は知的障害者7人と支援者がヒマラヤベースキャンプ(4200メートル)に挑み、登りきった6日間を撮る。厳しい自然に立ち向かい、体調を崩す人が何人も出たが、あきらめなかった姿や、共に歩く仲間との強い絆、どんなに障害が重くても夢はかなうことを描いた。

「考えるよりも行けるところまで行こう」が方針

上映後、ヒマラヤに挑んだ話があった。この人はできないだろうと拒否するのではなく、一步踏み出してみよう。考えるよりも行けるところまで行こう、がパンジーの方針だという。



林さんは「失敗したら、そのときは一緒に悔しがったらいい。一緒にやっということを大事にした」。小川さんは「ありのままの姿を見てもらいたかった」と。

当事者は「高山病で体調を崩した人が出た。翌朝には『行くぞ』と、みんなの気持ちが一緒になった」と。

地域の一員として人権課題に

田原本町企業内人推協がフィールドワーク

田原本町企業内人権教育推進協議会が11月8日、「畷傍山周辺の変容と今井町」をテーマにフィールドワーク。11人が参加した。



コースは神武天皇陵—生国魂神社—大神宮灯籠—おおくぼまちづくり館—今井まちなみ交流センター—春日神社—称念寺—今井町。案内は深澤吉隆・同和問題関係史料センター所長と竹中緑・研修員。

神武天皇陵は幕末に現在地に決定された。何度も拡張整備があり、1940年「皇紀2600年」の大拡張で東西500メートル、南北400メートルの広大なものになった。

旧家だった姿を残すおおくぼまちづくり館

生国魂神社、大神宮灯籠は、ともに洞村移転の経緯を実証する場所。生国魂神社は洞村の氏神で管理する。被差別部落が神社信仰から排除されていたという従来の理解を否定する事例でもある。

おおくぼまちづくり館は、大久保地区が1985年からの小集落地区改良事業の実施に伴い、旧丸谷家住宅を改装して設置。1920年に洞村から大久保町に移転された。当時の姿を残す建物である。

今井まちなみ交流センターは1903年に高市郡教育博物館として建てられた。1929年からは今井町役場として使用された。敷地内には、八木出身の儒学者、谷三山の碑がある。独学で漢学を修め、自宅に私塾興讓館を開き、多くの子弟を育てた。

同人推協は、企業が地域社会の一員として、地域の人権課題に取り組んでいくことを目的としている。

地域社会と生活文化を学ぶ

河合町人権学習講座で榛原フィールドワーク

第4回河合町人権学習講座が11月17日にあった。

「宇陀萩原周辺の地域社会と生活文化」をテーマにフィールドワーク。20人が参加した。コースは宇陀市役所—宇陀川分水工事跡—伊勢街道分岐点・あぶらや(=写真)



—榛原空襲慰霊碑—墨坂神社—宇陀水分神社。奥本武裕・天理大学非常勤講師が案内した。

河合町から宇陀市役所へバスで移動。道中では、奥本さんが事前説明。「地域社会には、2つの側面がある。一方で助け合ったり、共同したり。他方では違ったものや、外のものに対して排除する。差別は排除するときに現れる。このことを押さえておきたい」と。

榛原町は江戸時代から「おかげ参り」の宿場町として栄えた。年間、2～300万人の参拝者が往来した。「おかげ参り」は別名「抜け参り」と言われる。奉公人は主人に黙って伊勢参りすることや、関所を通ることも許された。宿場では、宿泊・食事の世話をタダでしてくれる風潮が定着。ここにも共助が表れていたという。

楽しいね！ 温かいよね！

11月の子ども居場所づくりは「わいわい食堂」

11月の子どもの居場所づくりは10日、三宅町保健

福祉施設あざさ苑の栄養指導室などをお借りして、「おぼっちのわいわい食堂」と名付けて行いました(=写真)。これまで自宅に



7～8人を招待して行っていたのですが、今回は申し込み制とし、小学生17人・中学生5人・高校生4人・サポーターの大人13人の計39人が参加してくれました。

この日のメニューはチキンカレーと手づくりフルーツ

ゼリー。チキンカレーは約70食用意したのですが、あつという間になくなり、残飯も全くありませんでした。

小学17、中学5、高校4名、計39人参加

今回も保護者、NPO、ひまわりの職員さんら地域の人たちの協力がたくさんありました。午前中はカレーやご飯の用意をし、午後はフルーツゼリーなどをつくりました。お米は寄贈していただいたものを使用させていただき、みかんの差し入れもいただきました。

参加してくれた子どもたちはさまざまで、放課後、ランドセルをもって参加してくれた学生服の子ども。友だちに誘われて初めて参加してくれた低学年の子ども。お互い久しぶりに会った高校生は再会の場として楽しんでくれました。小学生と遊んでくれたりしました。

あたたかい言葉を交わして優しい気持ちに

サポーターも仕事の帰りにかけつけてくれ、待ちわびてくれる子どもたちに笑顔で応えていました。「今度はいつ？」と聞いてくれる子。「また会いたいね」と言ってくれる子。子ども同士も「またあした」と、あたたかい言葉が交わされて、やさしい気持ちになりました。帰りにお家の人と一緒にあざさ苑のお風呂に入って帰る子もいました。



お互いが元気になる食堂を続けていきたい

わいわいとにぎやかで、いつも静かなあざさ苑が少し騒がしくなりました。いっぱい言葉を交わさなくても、そばにいて同じものを食べる。目が合う。知らない人と少しでも関われる場所。そんな場所に、疲れた子ども、疲れた大人、しんどいものを抱えている人たちが来て、少しほっこりしてくれるといいなあ、と思いました。

作る人も、食べる人も、お互いが元気になるそんな食堂を、いろんな人が集えるあざさ苑を利用して続けていきたいと考えています。

(子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫)

東大寺をSDGsで観る

県民歴史講座で五劫院などをフィールドワーク

同和問題関係史料センターの第4回県民歴史講座が11月7日にあった。

「東大寺をSDGsで観る」をテーマにフィールドワーク。コースは中村直三農功碑－みどりが池－転害門－五劫院－龍松院－二月堂－三月堂前



の石灯籠－辛国神社－大砲灯籠と吉村長慶－東大寺南大門の獅子像。案内は深澤吉隆・所長(写真)。

中村直三農功碑は登大路交差点北東角にある。山辺郡永原村(現天理市)の人物で、家系は代々非人番を務めた。直三は「六役」として活躍。「明治の三老農」の一人で、「勸農微志」をはじめ、多くの著作がある。農事改良や稲の品種ごとの反収を番付表にした。

みどりが池の東堤に井筒屋平右衛門が1675年、非人小屋を建設。50人前後の非人を収容し、草履や草鞋(わらじ)作りなどを行っていた。

「癩者」だった僧尼23人の名を刻す供養塔

東大寺境内の西北に立つ「転害門(てがいもん)」は天平時代(710年～)の伽藍建築を想像できる唯一の遺構(国宝)。2度の戦火にも焼け残った。

五劫院は華嚴宗の寺。鎌倉時代中期の創建で東大寺末寺。本尊は五劫思惟阿弥陀仏如来像(鎌倉時代の作・国重文)。境内には、龍松院公慶(1624～1705)の墓がある。龍松院は江戸時代の東大寺の僧。大仏が露座のままであることを嘆き、幕府に働きかけ、徳川綱吉の援助もあり、1692年に完成開眼法要。だが、1709年の落慶を見ることなく、江戸で没した。

境内に「光明山阿闍寺歴代之塔」と刻した供養塔がある。23人の僧尼の名が刻されている。「癩者」だったことや、北山十八間戸とも関連しているという。

この辺りは二月堂裏参道と言われる。田んぼの向こうには、「大湯屋」を見ることができる。

僧衣をまとった三昧聖が大仏の前で読経

龍松院は元東大寺の塔頭(たちゅう)の一つである大喜院。公慶が1686年に大仏修理・大仏殿再建のために建立した。1887(明治20)年に龍松院と改名。現在地に移転後、勸進所と称される。

1692年の大仏開眼法要には、大勢の参拝者が参列。その中には、僧衣をまとった70人余りの「三昧聖(さんまいひじり)」が居て、大仏の前で読経した。

三昧聖は墓地の管理や死者の埋葬に従事。地域社会の中で特別な目で見られていた。幕末期には、龍松院を頂点とする三昧聖組織が形成されていた。

大仏の再興に宋の工人、陳和卿が尽力

二月堂から法華堂(三月堂)へ。法華堂前には、1254年に奉納された六角石灯籠がある。伊行末によると思われる碑文が刻まれている。1180年の兵乱で大仏と大仏殿は焼け落ちた。その後、醍醐寺の僧、俊乗房重源が諸国勸進を行い、再興に尽力。1185年に大仏開眼供養。1195年に大仏殿の上棟供養を行った。



大仏の鑄造には、宋人の陳和卿が尽力した。重源が「宋人六郎ら四人」を招いた、と『東大寺造立供養記』に記されている。この六郎は伊行末だと考えられる。伊行末は東大寺の石壇修復に功績を残しただけでなく、日本で多くの石造物を残した。

南大門北側左右の石獅子像は伊行末の作

辛国神社から東大寺大仏殿前へ。鏡池に面して、台座のない八幡形の灯籠がある。灯籠は日露戦争後の軍拡に反対する吉村長慶が奉納した。元々、台座は地表に出て、大砲に模した形をしていた。第二次大戦後、「大砲」が進駐軍の目に触れてはいけないうして、東大寺が埋めたのだという。

東大寺南大門(なんだいもん)へ。1203年に仁王像(金剛力士像)と共に竣工した山門。国宝に指定。北側左右にある石獅子像は伊行末の作とされる。

部落差別事件の今日の特徴

和歌山で部落解放研究第56回全国集会

部落解放研究第56回全国集会が11月14、15両日、和歌山県民文化会館であった＝写真。講師の神田香織さんが記念講演。講談「はだしのゲン」を披露した。



地元の池田清郎・部落解放同盟和歌山県連副委員長が「和歌山県水平社創立100年」と題し報告した。

2日目の分科会は「部落差別事件の今日の特徴と取り組みの課題」に参加した。廣岡浄進・大阪公立大学人権問題研究センター准教授が「古地図と地名問題」、和田猷一・部落解放同盟中央執行委員が『個人情報保護法』改正に向けた課題」と題し報告した。

廣岡浄進さんが「古地図と地名問題」を報告

廣岡さん(写真)は「全国部落史研究会」の事務局長を務める。2013年には「前近代における差別呼称が確認できる絵図(古地図)のデジタル公開についての提言」を出している。黒衣同盟の創設者、廣岡智教

(1888～1945年)とは縁戚関係にある。父親も住職で、奈良五條にある「明西寺」住職の廣岡祐渉さんも存していると。祐渉さんとは、「部落問題全国交流会」(藤田敬一さん主宰)で何度か顔を見かけた。

「適切な解説を付けた公開」「可視化」が重要

報告では、古地図、絵図を紹介し、「高精度精細デジタル公開の潮流と差別記載」について説明。2003年に「解放新聞」に掲載した「古地図・古絵図刊行および展示に対する基本的考え方」を紹介し、「提言」に至る経過を語った。



この作業過程で、法務省が到達「インターネット上の同和地区に関する識別情報の適示事案の立件及び処理について」(2018年)を出した。そのことによって、「部落の地名は出してはいけない」といった萎縮が始まったと危惧している。「適切な解説を付けた公開」と、「可視化」が重要だと指摘した。

12月3日に生き生き交流祭

第29回生き生き交流祭が12月3日に三宅町文化ホールほかである。町内の各種団体・個人が実行委を結成。コロナ下で、4年ぶりに取り組む。

戦争や紛争で多くの人々が犠牲になっている。そんな状況下、人権をテーマに人と人とのつながりの大切さや、人権を考える機会になれば、として開催。ご来場の上、お楽しみを。



編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

イスラエルによるパレスチナ侵攻、大虐殺が続く。「天井のない監獄」ガザを執拗に攻撃。民族抹殺を図る。殺害された人は1万5千人にも及ぶ。イスラエルは1948年、アラブ人が住んでいた土地を掠奪して建国。以降、領土を拡張し続け、入植し、軍事占領を続ける。国際法違反を繰り返し、双方の共存を図る30年前のオスロ合意も破る。欧米諸国は中東分割支配を進め、石油資源を確保する。イスラエルの残虐行為に今、世界各地で抗議行動が広がる。私たちも、爆撃止める。子どもらを殺すな、の声を上げ続けたい。差別が憎悪を生み、戦争を引き起こすことを肝に銘じて。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/